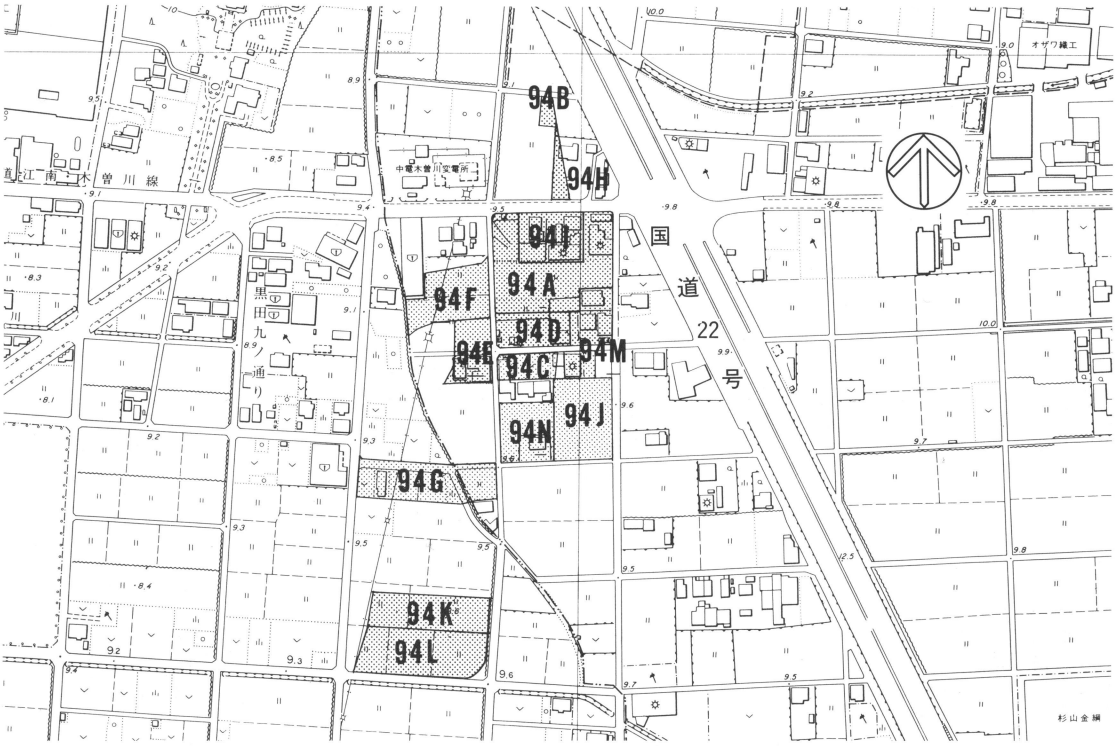
大 毛 池 田 遺 跡

調査の経過　大毛池田遺跡は、一宮市北西部の大字大毛字池田地区を中心にして葉栗郡木曽川町東部に広がる範囲に所在している。本遺跡は、木曽川によって形成された標高９ｍ前後の自然堤防上に展開しており、古墳時代から戦国期におよぶ複合遺跡である。

調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、昨年度に引き続き20,700㎡を平成６年４月より同７年３月にかけて実施した。

調査の概要　調査は、Ａ～Ｎの14箇所の調査区を設定して実施した。遺跡の基本層序は、第１層として耕作土、２層：暗灰褐色シルト、３層：暗灰黄色シルト、４層：灰褐色粘土、５層：暗紫褐色粘土、６層：灰オリーブ粘土、７層：灰褐色中粒砂の順に概ね分けることができる。検出された遺構と遺物は、古墳時代（Ａ期）、奈良・平安時代（Ｂ期）、鎌倉時代（Ｃ期）、戦国期（Ｄ期）の４時期に大きく区分できる。また遺構検出は、Ｂ～Ｄ期は２層上位で、Ａ期は４層または５層上位でおこなった。

今年度の調査成果としては、昨年度に続き、現状で県内最古にあたる古墳時代前期の水田遺構を広範囲にわたって確認したこと、Ｂ期にあたる奈良時代前期の「美濃」刻印須恵器をはじめとする特殊な遺物の出土、さらに平安時代の竪穴住居群等の検出があげられる。特筆すべき点としては、Ｄ期にあたる一辺１町程度の区画溝に囲まれた国人領主クラスの屋敷地を検出したことがあげられる。　（杉浦　茂）



第１図　調査区位置図（1/5000）

A期の遺構遺物　昨年度の調査でみつかった古墳時代前期に属する水田遺構について、本年度調査では南北230m、東西150mという規模の水田域の広がりが確認されたほか、新たに水田の構造に関する多くの知見を得ることができた。その結果、既に報告したものについても修正を必要とする箇所がでてきたため、併せて報告する。

水田が検出されたのはE区以外のすべての調査区であり、検出面は第4層淡灰色粘土層上位(AbI・F・G)あるいは第5層暗褐色～黒色粘土層上位(Aa・C・D・J)である。

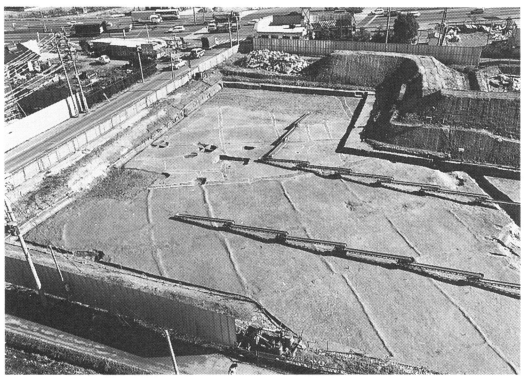
この上位水田と下位水田の検出面の違い、区画の規模・方向性などを検討した結果、第4層―水田耕作土層、第5層―水田基盤層という水田の構造が明らかになってきた。したがって、第5層で確認される畦畔は、昨年度調査部分も含めて4層上位水田以前の段階に作られた水田区画、すなわち開田時により近い時期の水田の痕跡と考えられる。また、基幹の水路の一部と思われるJ区SD17わきの高まりから出土した古式土師器片（S字甕C，D類、宇田甕、布留甕1点など）から、廻間Ⅲ期後半～松河戸Ⅱ期の時期にかけて断続的に水田耕作が続けられたと思われる。

今回の検討の契機となった第4層上位水田（AbI区）は、ほぼ全面を洪水性の堆積物で覆われており、埋没直前の水田景観を伝える多くの資料を提供した。まず、砂層を取り除くと厚さ10cm前後の灰色粘土（耕作土）層にあたり、同じ土壌による畦畔の高まりが確認できた。上端幅30cm、高さ20cmの大畦畔が大区画を構成し、これを幅20cm、高さ5cm程度の小畔が細分して小区画を形成する。水口も随所にあり、特に南北の大畦畔に設けられた2カ所の水口では西側の区画に水を落とすような構造が認められた。上位水田での注目すべき成果としては、小区画の配分や給配水の単位となる「大区画」が新たに確認されたこと、耕作土上面で足跡のほか稲株跡とみられる小ピットが多数確認されたことなどがあげられる。

古墳時代の遺物を含む遺構として溝3条（SD17・18・19）を検出した。これらの溝はほぼ並行してして延び、SD19はU字状の断面を呈し、遺物は6世紀の須恵器蓋杯数点(H－44）を出土した。

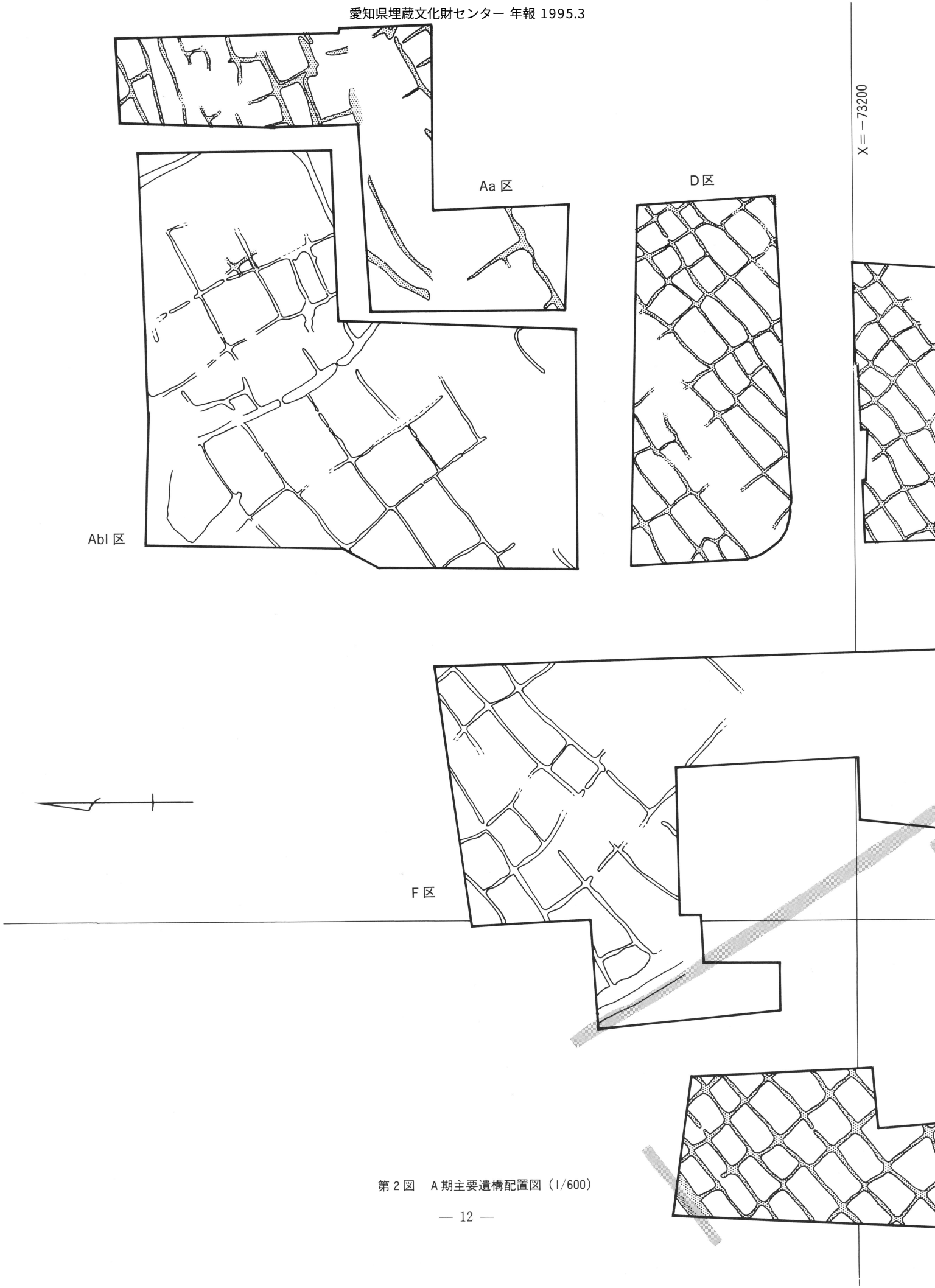
なお水田調査に関しては、矢田勝氏（静岡県埋蔵文化財調査研究所）にも多くの御助言をいただいている。

（北條真木）

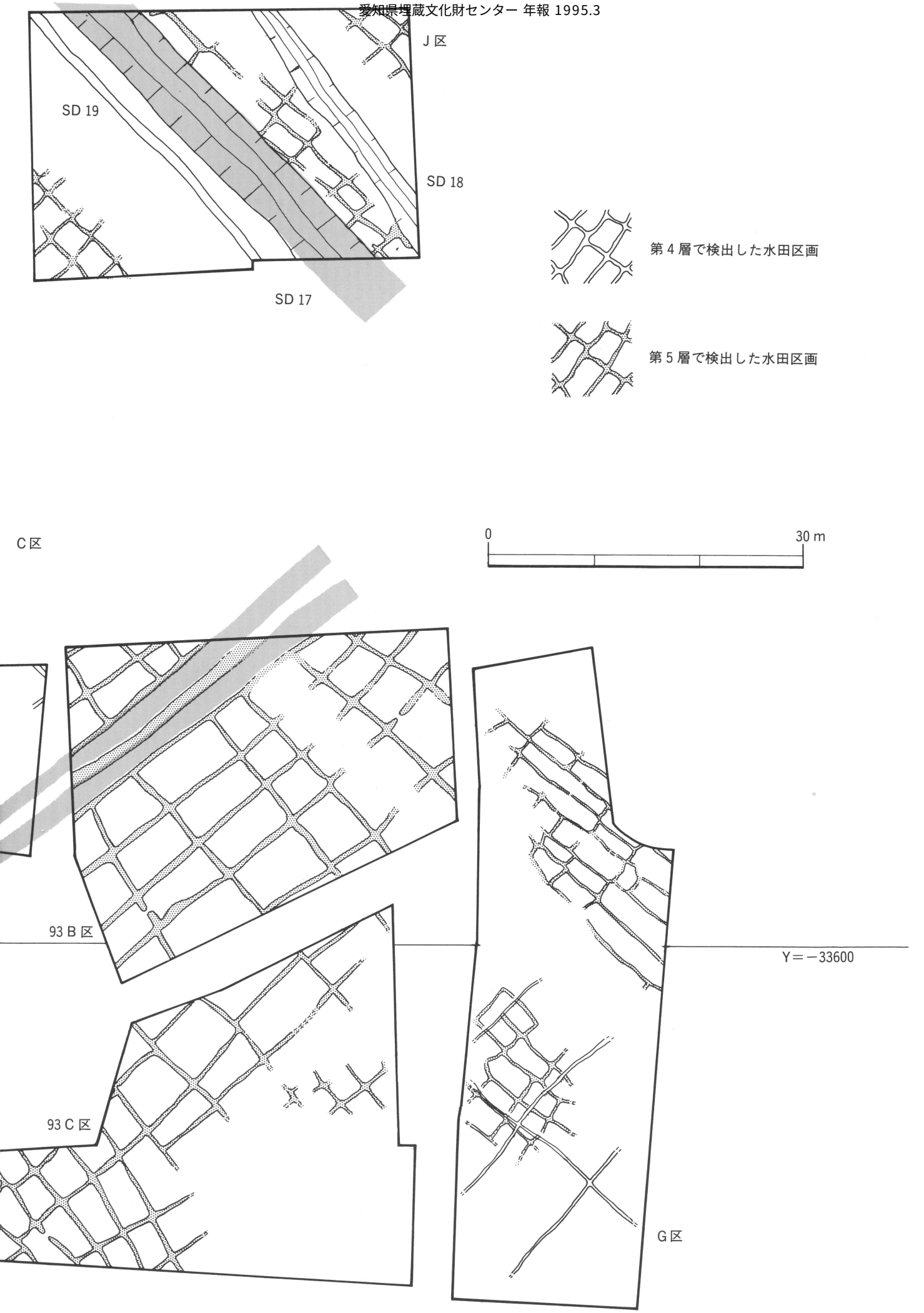


AbI区　水田全景

足跡・稲株痕（？）検出状況



第２図　Ａ期主要遺構配置図（1/600）

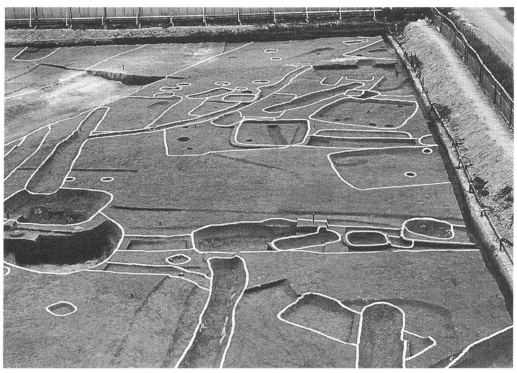

J 区
SD 19
SD 18
SD 17
第 4 層で検出した水田区画
第 5 層で検出した水田区画
C 区
0
30 m
93 B 区
Y＝－33600
93 C 区
G 区

Ｂ期の遺構遺物　幾つかの調査区を横切る形で、北東－南西方向へ続く数条の溝が検出された。この地域の自然地形の影響をうけて形成されたものとみられる。その他の遺構はこれらと相前後する形で展開していた。

検出された遺構やそれに伴う遺物から、この時期は前期（奈良時代以前）と後期（平安時代）の２小期に細区分できそうである。

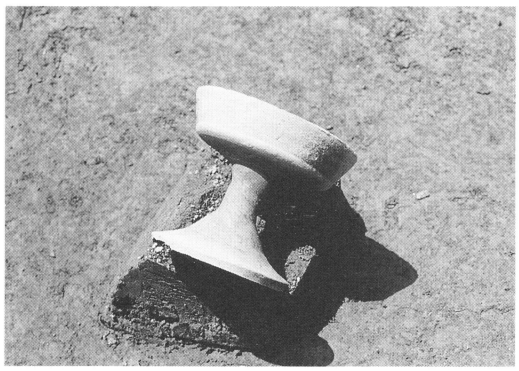
前期：大溝（Ｍ・Ｃ・Ｇ区）、竪穴住居跡（Ｆ・Ｊ・Ｍ区）、井戸（Ｆ区）、鉄滓が出土した土坑（Ｆ区）などを検出した。竪穴住居跡は全部で17棟あり、１辺４～５ｍ四方である。方位の類似性から主軸をＮ－20°－Ｅとするものと、Ｎ－０°－Ｅとするものの二つに区分できる。それぞれの重複関係から、前者が奈良時代前半、後者が奈良時代後半とみられる。前期の遺物としては、須恵器の蓋・杯・高杯・瑳・鉢・甕・細頸瓶・円面硯など、土師器の甕、高杯などが出土しており、また、器種もバラエティーに富んでいる。中でも「美濃」刻印を有する須恵器が２点出土したことや畿内産の土師器の杯が出土したことは特筆すべきであろう。

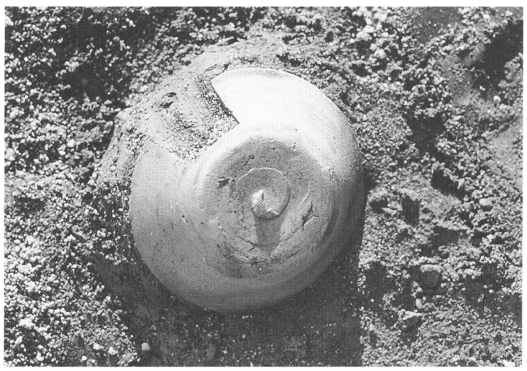
後期：大溝（Ｍ・Ａ・Ｄ・Ｇ区）、竪穴住居跡（Ｆ・Ｍ区）、池（Ｅ区）、土坑（Ａ区）などを検出した。竪穴住居跡は全部で６棟あり、１辺ほぼ５ｍ四方である。主軸の方向はいずれもＮ－12°－Ｗである。池の大きさは、検出できた範囲では、南北の径約30ｍを測る。この池は中世前半には埋積したと見られる。後期の遺物としては、灰釉陶器の椀、緑釉陶器片、土師器の甕などが出土した。前期に比べて土器の器種は少ない。



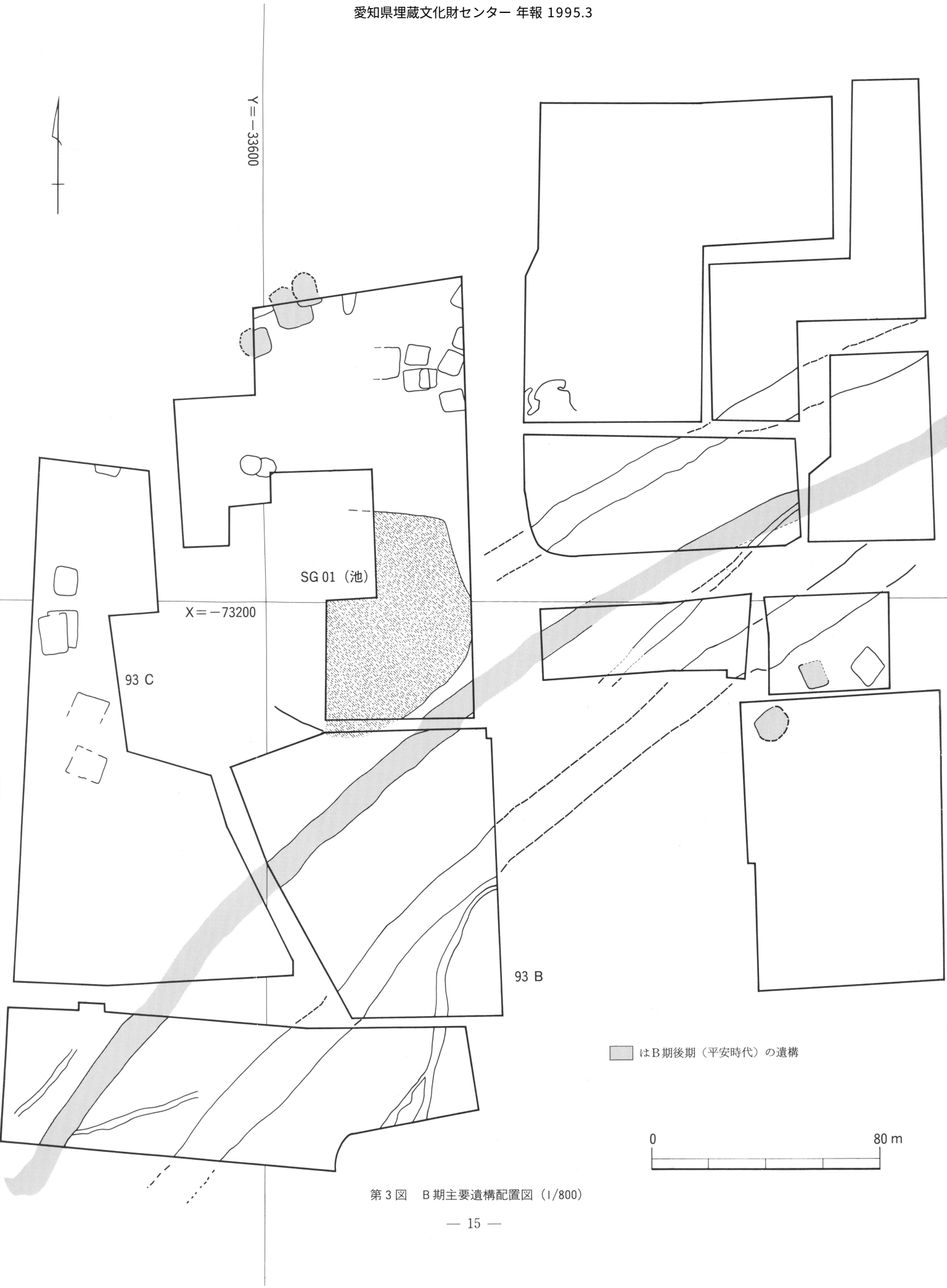
Ｂ期（前期）の竪穴住居

「美濃」刻印を有する杯（Ａ区）





Ｂ期（前期）の出土遺物（左：Ａ区、右Ｇ区）



第３図　Ｂ期主要遺構配置図（1/800）

B期の前期は、土器の器種の豊富さや出土量の多さに対して、性格が把握できる遺構の数は決して多くない。恐らく平安時代以降に削平をうけたためと思われる。それ故にこの時期の大毛池田の様子を把握することは困難であるかもしれない。そこで今回については遺物の様相からの復元を試みたい。

① 土器の器種構成は、供膳具が主体である。

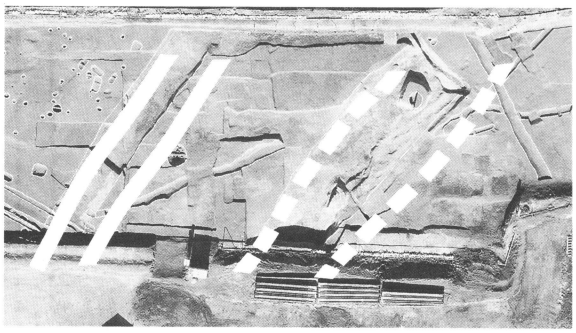
② 官衙と想定される遺跡で出土している「美濃」刻印を有する須恵器や文房具として使用された円面硯が存在する。

③ 94F区で鉄滓が出土していることから、当時この付近で鍛冶を行っていた可能性がある。

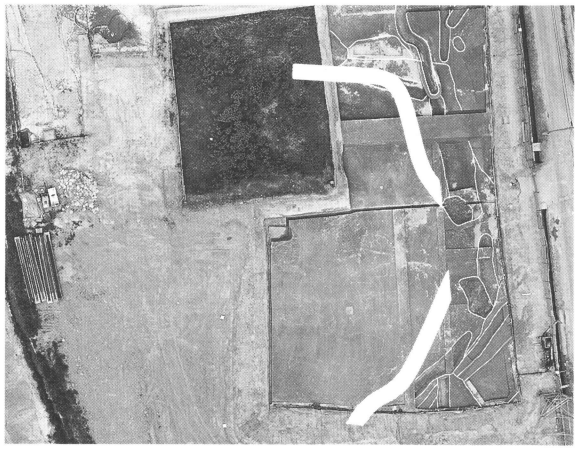
④ 93B区から銅椀蓋片や金属製仏器を模した須恵器の蓋・椀が出土している。

以上の4点から、当該期には官衙もしくは寺院的な施設が存在していたと考えられる。

B期の後期は、前期で出土したような特異な器形の遺物はなくなり、日常雑器の類の器種が大半を占める。94F区で比較的まとまって竪穴住居跡が検出されたが、平安時代の後半までは継続しないようである。93A区で同時期の竪穴住居跡が多数検出されたことも考慮すると、この時期の前半期までは集落が形成されていたと考えられる。しかしこの時期の末期には池が存在していたことから、今年度調査した範囲の付近では、次第に居住には不適当な環境に変化していったようである。　　（黒田哲生・飴谷　一）

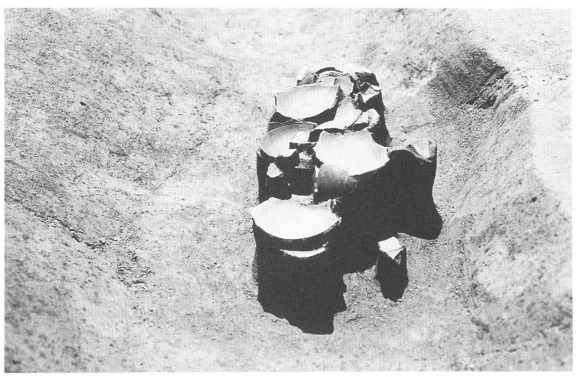


B期の大溝（白線左：後期、右：前期）（G区）



B期（後期）の池（白線部分）（E区）

B期（後期）竪穴住居（J区）

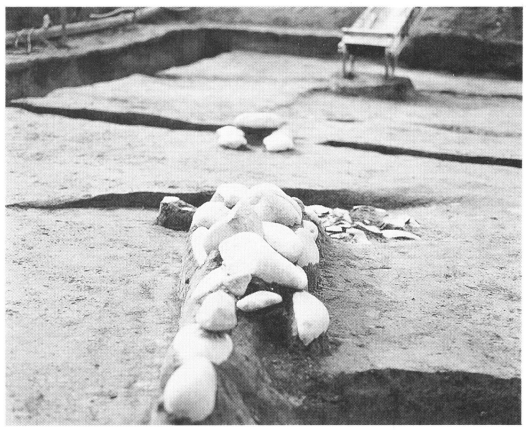


B期（後期）出土遺物（F区）

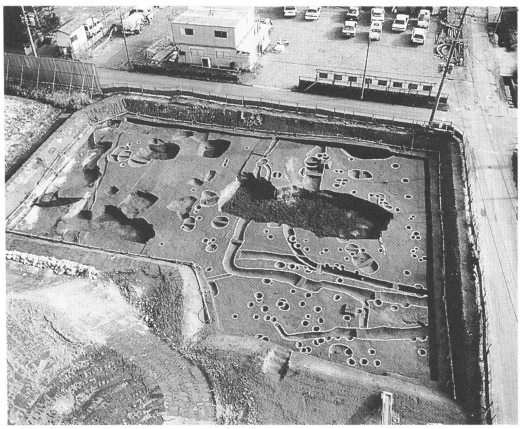
C・D期の遺構・遺物　C・D期の特筆すべき遺構は方形居館跡である。その区画溝は、A・D・C・M・Jの各調査区で検出された。南北の長さは100m余、東西はA区で検出されただけでも80mに達し100mを越えることが予想される。その構造に南北方向のものと東西方向のもので顕著な違いが見られる。南北方向のものは断面が皿形で深さが検出面から60cm余りであるのに、東西方向のものU字形で深さも検出面から120cm余りである。遺物の出土量も多く、特徴的なものとして北西コーナーからは数体分の馬の骨が、南西コーナーからは大量の土器とともに漆椀等の木製品が出土している。区画溝の内側には多数の溝がめぐり、内部をいくつかの空間に分割している。区画内の中央やや北よりからは無数のピットが検出され、この場所に掘立柱建物が存在したことが想定される。また、ピット群のあいだから石組みの配列遺構が検出されている。これは、区画溝の東西方向と平行するもので、その構造は同一幅で2列に並べた石の上に大きな石を蓋のようにのせたものである。あいだに1.7mほど石列のきれたところがあり、検出状況から意図的にあけたものと思われる。

区画溝の埋積後の遺構として特徴的なものにSX01（A区）がある。大量の土器片とともにその最下層から「天文八年（1539）」の紀年銘が記された木簡を検出している。区画溝

戦国期東西方向・区画溝の規模（A区）

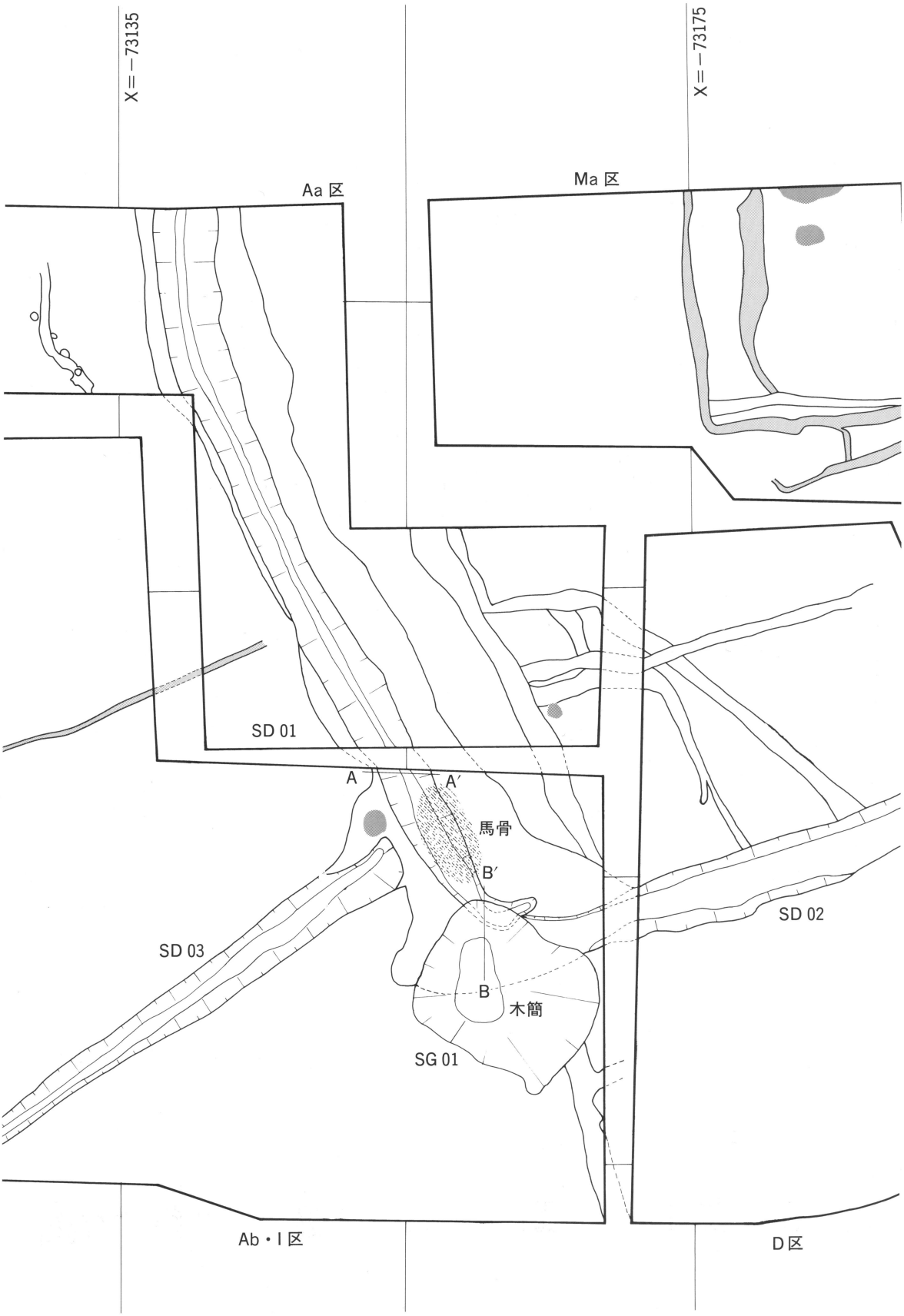


石組遺構検出状況（M区）

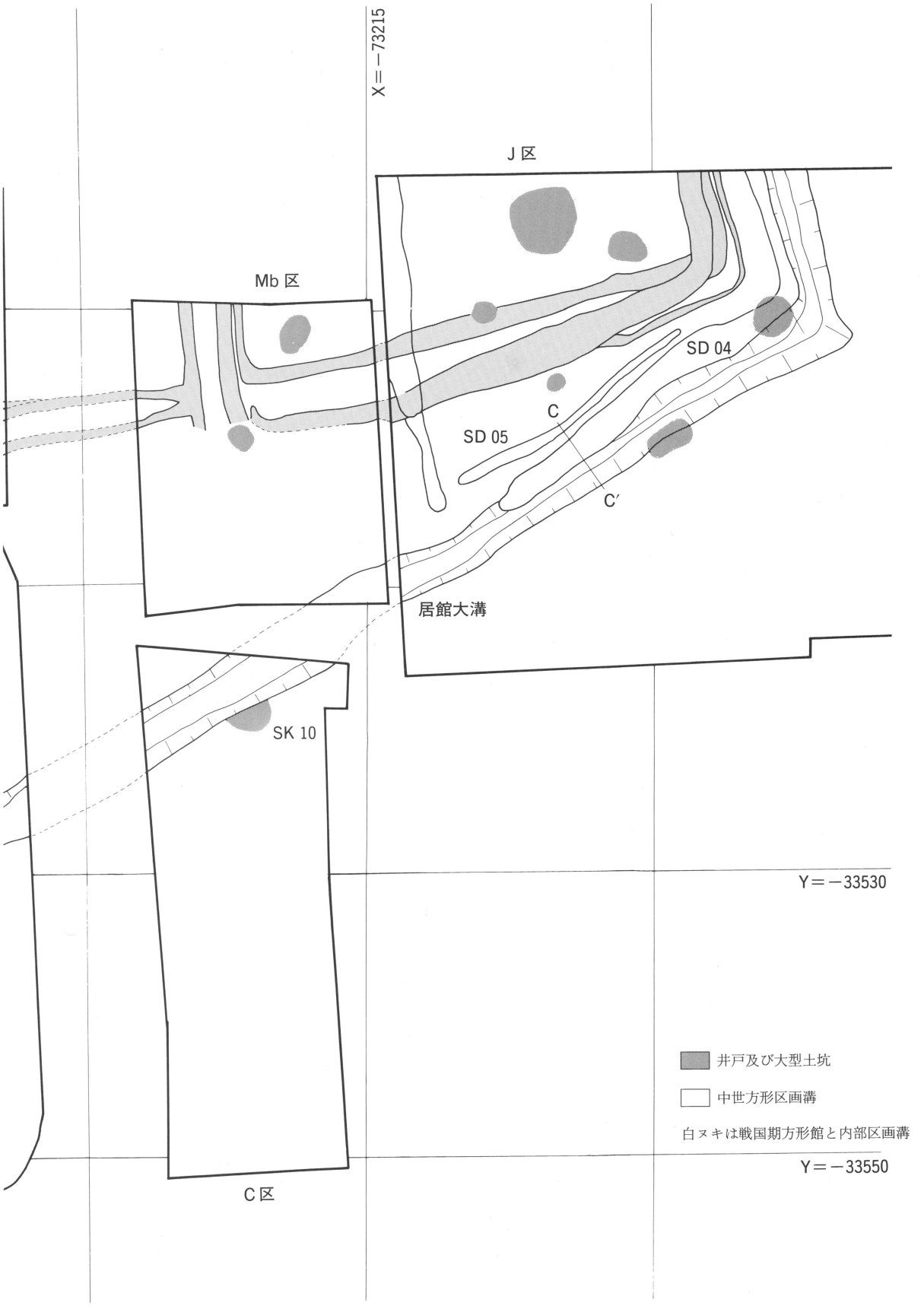


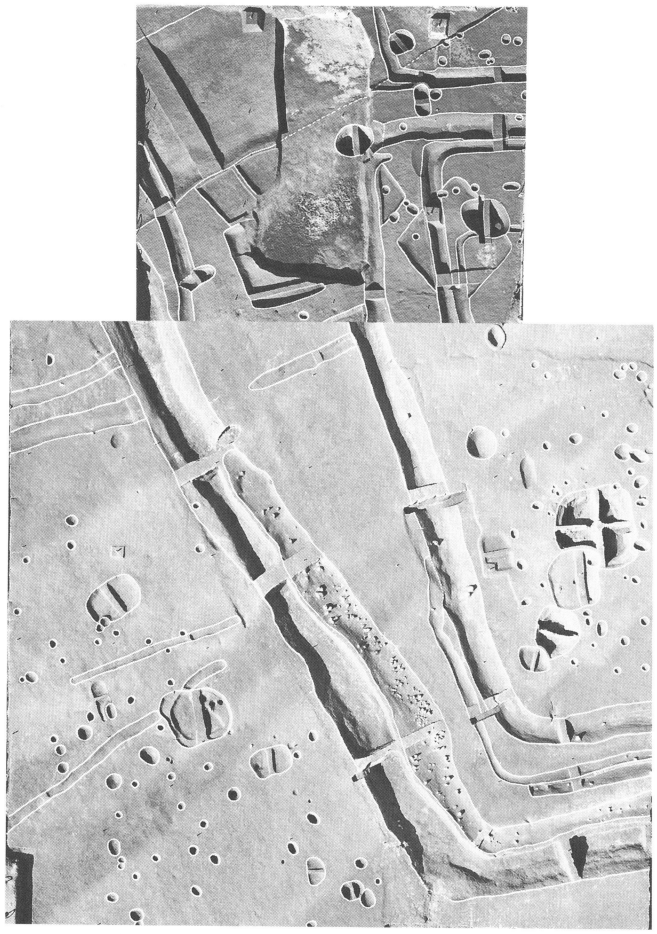
中世方形区画溝とピット群（M区）

SD01　土器出土状況（J区）

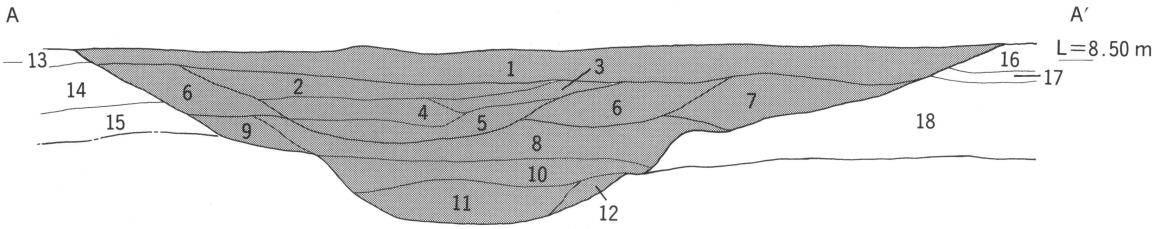


第４図　Ｃ・Ｄ期主要遺構配置図（I：400）


X＝－73215
J 区
Mb 区
SD 04
C
SD 05
C′
居館大溝
SK 10
Y＝－33530
井戸及び大型土坑
中世方形区画溝
白ヌキは戦国期方形館と内部区画溝
Y＝－33550
C 区



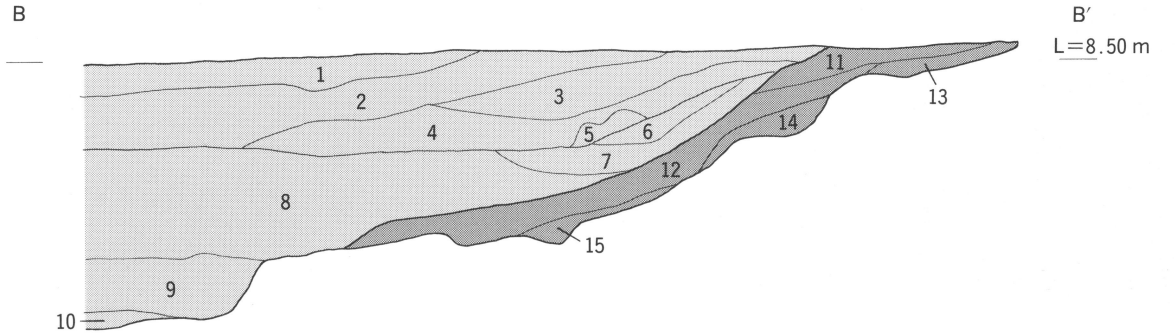
A・D・M・J区全景（C・D期）



1 2.5 Y 7/1 粗粒砂 沈鉄含む
2 5 Y 5/1 粘質シルト 沈鉄含む
3 5 Y 6/1 粗粒砂 沈鉄含む
4 2.5 Y 5/1 粗粒砂＋2.5 GY 8/1 シルトブロック 沈鉄含む
6 2.5 Y 6/1 粗粒砂 粘質をおびる 沈鉄を含む
7 10 YR 6/1 砂質シルト＋2.5 GY 8/1 シルトブロック 沈鉄含む
8 10 YR 5/1 砂質シルト 沈鉄含む
9 2.5 Y 7/2 細粒砂＋2.5 GY 8/1 シルトブロック
10 10 YR 4/1 粗粒磁＋10 GY 8/1 シルトブロック 沈鉄含む
11 5 PB 4/1 粗粒砂 噴砂が入る
12 10 GY 8/1 シルト＋5 PB 4/1 粗粒砂 縞状堆積

1～12
SD 01 埋土

13 5 YR 6/1 砂質シルト 沈鉄含む
14 5 Y 7/1 極細粒砂＋5 Y 6/1 粘質シルトブロック
15 7.5 Y 6/1 極細粒砂
16 10 Y 8/1 極細粒砂（洪水性堆積）
17 7.5 YR 5/2 砂質シルト 白色粗粒砂の間層が入る
18 5 Y 7/4 砂質シルト（上面のベース）

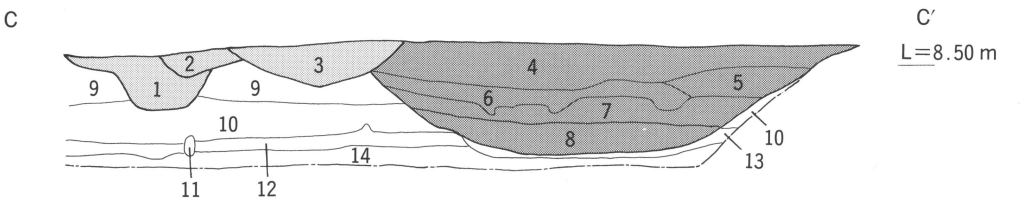


1 2.5 Y 7/1 粗粒砂＋5 Y 7/1 シルト 沈鉄含む
2 7.5 Y 6/1 粘質シルト 沈鉄含む
3 2.5 Y 7/1 粗粒砂 沈鉄含む
4 7.5 Y 5/1 粘質シルト＋2.5 Y 7/1 粗粒砂 沈鉄含む
5 2.5 Y 7/1 粗粒砂 沈鉄含む
6 5 Y 7/1 粗粒砂 沈鉄含む
7 2.5 Y 5/1 粗粒砂 白色粗粒砂の噴砂が入る
8 2.5 GY 5/1 粘質シルト 骨片・白色砂粒を含む
9 5 GY 5/1 粘土＋5 R 3/1 粘土ブロック＋10 G 7/1 シルトブロック
白色細粒砂の薄層をはさむ 骨片を含む
10 5 BG 4/1 粘土＋5 R 3/1 ブロック＋10 G 7/1 ブロック

1～10
SG 01 埋土

11 10 YR 6/1 粗粒砂 粘質っぽく沈鉄含む
12 10 YR 5/1 粘質シルト 白色粗粒砂を含む
13 2.5 Y 7/1 粗粒砂 沈鉄含む
14 2.5 Y 5/1 砂質シルト＋5 Y 8/1 細粒砂ブロック
15 5 Y 4/1 粗粒砂

11～15
SD 01 埋土



1 2.5 Y 4/3 シルト 黄褐色土が混じる（SD 05 埋土）
2 7.5 YR 4/4 砂質シルト
3 10 YR 3/4 シルト（SD 04 埋土）
4 10 YR 4/3 シルト 黄褐色土が混じる
5 10 YR 3/4 砂質シルト
6 2.5 Y 5/2 細粒砂が混じる粘質シルト
7 2.5 Y 4/1 中粒砂が混じるシルト
8 2.5 Y 4/2 粘土

4～8
SD 02

9 2.5 Y 5/3 粘質シルト
10 2.5 Y 4/4 シルト
11 10 YR 4/4 砂質シルト
12 10 YR 2/2 粘土
13 2.5 GY 4/2 細粒砂＋10 YR 2/2 ブロック
14 2.5 Y 5/3 細粒砂

から出土した土器とＳＸ01出土の土器とは余り時期差のないことから、区画溝は16世紀半ばごろに埋積したと思われる。なお、このＳＸ01は亀・貝・ヒシなどの大量の水棲生物も検出していることから短期的に池として存続していたことが想定される。ＳＤ01（Ｊ区）も区画溝埋積後の遺構であり、浅く掘り込まれた溝からは土師皿を多く含む大量の土器が出土した。

区画溝掘削以前の遺構として特徴的なものに灰釉系陶器の椀・皿を大量に出土したＳＫ10（Ｃ区）がある。これは井戸の廃棄後に廃棄土坑として利用したものと考えられる。また、Ｊ区中央部で時期差が多少あるものの２基並んで井戸枠のしっかり残った井戸が検出された。

今後Ｃ・Ｄ期について以下の点について考察を進めていきたい。

１　多数検出された溝を遺物や重複関係、溝の方向性から細かく時期区分し、各時期ごとの区画を復元する。

２　１をふまえ、遺物等の検討から溝で区画された方形居館の内部空間がそれぞれどのように利用されていたかを考察する。

３　ＳＸ01出土の木簡は、親の四十九日の追善供養を薬師如来に祈願した願文が書かれたものであるが、これの具体的使用法を調べるとともに区画溝出土の馬の骨が単なる遺棄か宗教的意味をもつものかも調べる。

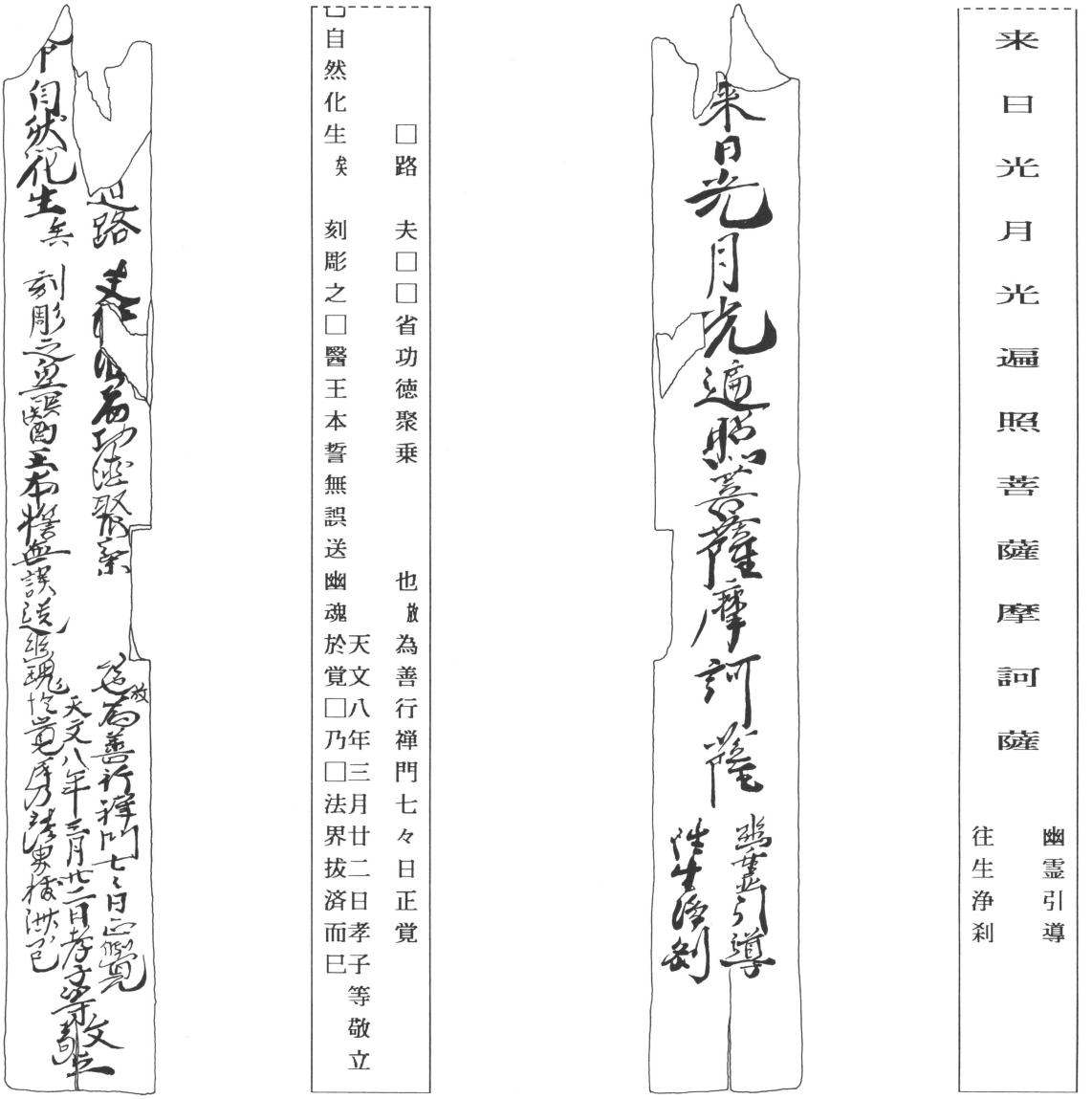
４　方形居館の区画溝は「天文八年」以後余り時をおかずに埋積されたが、その後もここは居住域であった。しかし、出土遺物からみるかぎりそれも長期にわたるものではないように思われる。戦国期の文献資料を調べるなかで、この、区画溝の埋積・居館の廃絶の意味を歴史的に位置づける。さらに、大毛沖遺跡・田所遺跡などの近隣の遺跡のＣ・Ｄ期と同時期の様相を視野にいれつつＣ・Ｄ期の推移を捉える。　　（伊藤秀紀・樋上　昇）

追記

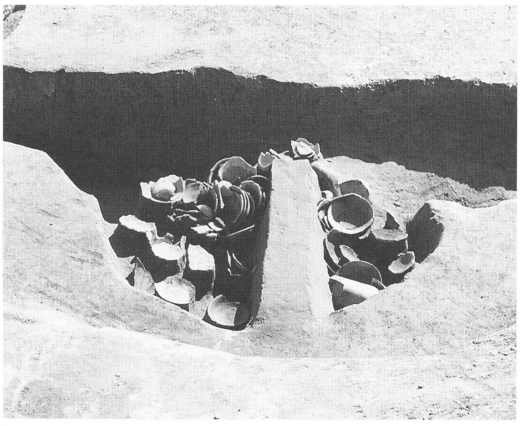
その後、出土遺物の検討から内部区画溝と思われていたものの中に戦国期方形居館より以前（12～13世紀）の方形区画があることがわかった。詳細は第４図を見ていただきたい。

ＳＫ10土器出土状況（Ｃ区）

井戸枠検出状況（Ｊ区）



第6図　ＳＸ01出土木簡（Ａｂ区）　1/3



ＳＫ56土器出土状況（Ｋ区）

木簡出土状況（Ａｂ区）

大毛池田遺跡の自然科学

古墳時代前期の水田跡堆積物の基本層序は、白色極粗粒砂層を基盤として、その上位に①緑灰色粘土層、②黒色～黒褐色粘土層、③灰色～紫灰色粘土層、④灰褐色極細粒砂層の順に５層が確認できる。このうち②黒色～黒褐色粘土層が水田の床土に、③灰色～紫灰色粘土層が水田耕作土にあたり、③層をパックする形で④灰褐色極細粒砂層が覆う。以上の堆積層序は大毛池田の水田跡では普遍的に認められる。

②黒色～黒褐色粘土層は砂やシルト成分を含まず、堆積構造の見られない塊状均質な粘土層である。層厚はおよそ10cm程で、ほぼ水平に側方への連続性も良い。また、色調は非常に濃い黒色を帯び、堆積物を側方へ追跡する場合の鍵層的な役割を示す。プラント・オパール分析では、単層上部から若干のイネのプラント・オパールが認められるものの、全体に希薄である。本層は水田跡の床土と考えられる。③灰色～紫灰色粘土層は若干のシルト成分を含んだ塊状、均質な粘土層である。初生堆積構造は残っていない。層厚はおよそ10cmで、ほぼ水平に側方へ連続する。下位の②層とは明瞭な色調の差から区別でき、数mm～１cmほどの微少な凹凸面をもって堆積する。イネのプラント・オパールは単層全体で認められ、下部層特に②層との境界面直上でその密度が高い。本層は水田耕作土と考えられる。④褐色シルト質極細粒砂層は上記の③層を覆う砂層である。初生堆積構造として、比較的弱い流れを示すアンギュラー型のフォア・セット葉理が確認できるところ（ＡｂＩ区）もあるが、全体に堆積構造の残りは悪く、塊状を呈するのが普通である。基本的に側方へ層厚を減じるレンズ状堆積を示す。そのため層厚は、最大およそ30cmのところ（ＡｂＩ区）や、場所によっては中世の褐色シルト質粘土層が、本層を欠いて③層と直接癒着するところもあり変化が著しい。

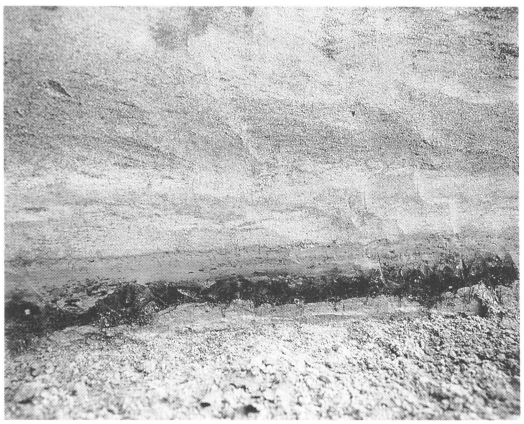
Ｆ区・Ａｂ区では、水田面上に足跡が確認された。水田耕作土の③灰色～紫灰色粘土層の上面に踏み込まれ、深さ約2～3cmの凹部をシルト質極細粒砂層が充塡している。検出時には明瞭な色調の差となって識別できる。足跡はヒトやウシ、シカなどの偶蹄類、ウマなどの奇蹄類と推察されるものが確認される。これらは平面上に規則性なくランダムに配置し、歩行の方向性いわゆる行跡は認められなかった。また、水田面には乾裂などの乾燥履歴は認められない。このことは、耕作土が未固結時に足跡が付けられた後、洪水砂により一気に埋積されたと思われる。

Ａｂ区の溝、ＳＤ04からはウマの下顎骨３点、脚の骨５点が出土した。これらは塊状の暗灰色極細粒砂混じりのシルト層中より出土した。保存状態は悪く、藍鉄鉱が置換し表面の剝離が激しい。また、骨と共に戦国時代の遺物も出土している。

Ａｂ区ＳＸ01およびＪ区ＳＫ94では、カメの背甲が出土した。これらは植物片を大量に含む暗緑色粘土層から出土し、背甲は一部藍鉄鉱に置換されている。また、植物の種子および材などの大量な集積、甲虫の体節片、小動物の骨片、藍鉄鉱の沈積などから、この溝はかなり淀んだ滞水環境であったことが示唆される。

Ｅ区では古墳時代前期の水田面を切って、池を埋積する腐植質堆積物の集積が確認された。水田跡の基盤層である白色極粗粒砂層が、腐植質堆積物の集積部分で凹部をつくって

おり、明瞭な境界面をもって、その砂層の上位に黒色～黒褐色を呈する腐植質堆積物が埋積する。層厚は池の中央部でおよそ１ｍである。植物片の集積のみからなり、ときに厚さ数㎜の極細粒砂の薄層が挟まれる。　（鬼頭　剛）



水田堆積層と上を覆う洪水性砂層（Ａｂ区）

Ａｂ区ウマの骨出土状況

まとめ　以下、今年度の調査成果の要点をまとめつつ、今後の検討課題をしめしておきたい。

Ａ期　昨年度同様に古墳時代前期の水田遺構を良好な状態で検出でき、方向性を持った大畦畔を基準に、小畦畔によって小区画水田が形成されている状況の認識を深めることができた。例えば水田面を水平に保つための工夫として、畦畔の高さを調節することで緩やかな起伏のある微地形を克服していることなどはその一例である。また、Ｇ区の例に見られるように水田の区画は小区画から大区画へと変化しており、当該期の生産力の問題を明らかにしていくことは今後の課題であろう。

Ｂ期　『尾張国正税帳』天平６年（734年）に葉栗郡司として「少領外従八位上勳十二等和爾部臣若麻呂」と「主帳外少初位上勳十二等伊福部大麻呂」の名がみえる。本遺跡に隣接した木曽川町門間地区に伊富利部神社が鎮座しているが、この神社は伊福部氏と深い関係にあると言われている。このことから本遺跡周辺は伊福部氏の勢力基盤であった可能性があることを指摘しておきたい。

Ｃ・Ｄ期　古代末から中世にかけて周辺には上門間荘や黒田荘が営まれるが、当該期の遺構としてはＥ区で検出された池跡やＦ区の溝等を除いては稀少であり、不明な点が多いのが現状である。むしろＤ期にいたり、遺構の密度や遺物の量ともに充実してくる点は重要である。しかもその大半が、ＡＤＣＪ区にまたがる区画溝周辺からであることから、戦国期において居館を築き、在地支配を行った勢力を考えざるを得ない。今後、文献の調査等も合わせ、その埋もれていた居館の実態を明らかにしていきたい。　（杉浦　茂）